

第 33 回 安田女子大学・安田女子短期大学 エッセイコンクール

自由部門 優良賞「苦手なもの」

家政学部生活デザイン学科 3 年 1 組 山際 萌香

苦手なものの話をしようと思う。

好きなものや得意なものを語る方が、お互い負担にならないのは分かっている。苦手なものこそ共感してほしいという思いから、熱量はこちらの方が勝っているので、こちらとしては筆が進むという事をご了解願いたい。

まず、私は人前に出ることや話す事が苦手だ。

出席を取る時の返事や国語の授業の本読みですら鼓動が不安定になるほど緊張しやすい私は、自我が芽生えた時から人前を恐怖の対象としていた。義務教育とは時に残酷で、学校生活の中で人前に立たざるを得ない場面は数え切れない程あった。教育の一環としてなのだろうが、その度に私は人知れず苦しんだ。さすがに大学生ともなるとそんな機会なんてないだろうと高をくくっていたが大間違い。ゼミでのささやかな発表から始まり、英語でプレゼン、自作品についてプレゼン、グループワークでプレゼン・・・プレゼンテーションのオンパレードである。話が違う。授業でパワーポイントの作り方を習い始めた時から嫌な予感はしていたのだが、まさかここまでしょっちゅうあるとは。最近はもう色々と諦め、いかに誰の記憶にも残らず早く終わらせられるかという事を考え始めた次第だ。

発表苦手なんだよね、と相談すると、大体アドバイスとして返ってくるのは同じ。慣れだよ、皆一緒だよ、意外と真剣に聴いている人はいないよ。だが私が最も恐れているのはなによりも、公共の場において私が主役にならざるを得ない時間がある、ということである。皆の時間を、奪っているような感覚さえあるのだ。毎回の異常なほどの緊張感も、そこからくるものであろう。とにかく苦痛なのだ。それこそ皆私の事をどう思っているのか分からないから恐ろしい。私がプレゼンやら発表やらで話を始めた時には、是非皆様、目を閉じて耳を塞ぐか談笑するかスマホを取り出して頂きたい。くれぐれも、傾聴しないように。

数学が大嫌いである。

女性の方が数学を苦手だとされているが、実はそうではない。本来なら男性と女性において数学的能力に大きな違いはないとされる。女性は数学が出来ない、という思い込みのせ

いで能力を発揮出来ていないケースが多いらしい。ちなみにこのように思い込みや風潮で能力が下がってしまう事をステレオタイプ脅威という。それを踏まえた上で。

私は数学が大嫌いである。

小学校中学年で掛け算が縦になってからというもの、私は算数及び数学が出来なくなってしまった。進研ゼミや塾の力を借りてなんとか人並みにやっていたのだが、高校生になって自力で勉強せざるを得なくなった途端、数学のテストの点は奈落の底へと落ちていった。平均点80点以上だったらしい高校一年の中間テストでは70点台、そしてそれが高校3年間の最初で最後の高得点だった。国語の成績は良く、塾の模試でも先生を驚かせるような点を取ったことすらあるのに、数学だけは地を這うように底辺でくすぶっていた。

流石に危機感を覚え、当時クラス担任で数学を教えて下さっていたH先生の元に足しげく通い、今思えば基礎中の基礎のような事ばかりだったが質問をし、一緒に問題を解いた。H先生は理解の遅い私に根気強く丁寧に、優しく教えて下さった。出来が悪い生徒ほど可愛いものなのか、その先生は異常に私に目をかけてくれたのを覚えている。その御恩は成績で返すのが道理なのだが、残念ながら私の数学の点数はマンツーマン指導を経ても上がることはなかった。センター試験では数学を使わないと決めて勉強を止めてしまい、案の定凄惨な点を取ったにも関わらずH先生は普通の成績をつけて下さったので頭が上がりません。今度菓子折りを持って訪問しようと思う。

大学生になり、これからは数学を避けて生きていこうと誓った矢先、学部上の関係で数学の授業を履修することになった。一言でいうと地獄である。建物等の構造式を計算するというものだが、初回の授業で配られた高校数学の計算式のプリントがまともに解けなかった。この時点で私は行く末を察した。それからの授業は毎回絞首台に登るような思いだった。分からない。あまりにも分からなくて最早どこが分からないか分からない。どこか脳に異常があるのではないかと本気で疑った程だ。授業を聞けば聞くほど動きを止める我が文系脳。下りていく瞼。停止する思考。そして逃避行。

せめて試験だけは、と友達に教えてもらいながら真剣に、脳が溶けるほど真剣に取り組んだ。・・・にも関わらず再試験となってしまった。あれだけ死に物狂いで取り組んだのに結果が伴わなかったという絶望感。打ちひしがれ、不甲斐なさに涙を流し、そして、私は寧ろ吹っ切れてその授業の単位とは別れを告げることにした。後期にも開講するそれは、もう取らない。そう決めた途端、目の前が晴れやかになったのを覚えている。基本物事は最後までやり抜くスタンスだが、自我を保つためなら時には逃げも大いに必要だ。今回単位の代わりに知り得たものだ。

もう一つ苦手なものがあつた。文章を絞めるということが。

<講評>

自分自身が感じる苦手なものをあえて論じ、自分自身を分析的にみているという視点が面白い。表現された内容に自虐感はあるが、非常にユーモラスである。読者の心に染み入るような細やかな文章描写の末に、「文章を締める」ことが苦手という最終描写が全体にインパクトを与えている。特に、このエッセイの文章のユーモア・センスは大いに評価できる。最後の「自我を保つためなら時には逃げも大いに必要だ」は笑いを誘う。著者の視線の低さが、この嫌みの無い文章を生み出しているようにも思える。その分、若干ペースのあるエッセイに仕上がっており、読者の共感を得ることに成功している。

審査委員／永田彰子、吉目木晴彦、大庭由子、西村聡生、富岡治明（委員長）